

スポーツ系部活動における目標志向性が部活動での 取り組みに及ぼす影響 — 個人目標, 集団目標の観点から —

石田 靖彦* 小川 久之**

*学校教育講座 (心理学)

**中小田井小学校

Relationship between club members' sport orientation and their behavior in school extracurricular athletic clubs.

Yasuhiko ISHIDA* and Hisashi OGAWA**

*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Nakaotai Elementary School, Nagoya 452-0822, Japan

問題と目的

中学生における部活動の意義

中学生にとって、部活動は学校生活の中で学業とやらんで重要な活動である。学業面だけでなく、部活動での活動や活躍に期待している中学生は少なくない。他にも、異なるクラスの生徒や、異なる学年の生徒と同じ目標に向かって活動することは、学習場面では味わうことのできない部活動独自の醍醐味のひとつであろう。

角谷・無藤(2001)は、主体性や親密性の欲求が高まる中学生にとって、部活動が主体的に活動できる場や、仲間との持続的で親密な関係を築くことのできる場を提供する役割を果たしていることを指摘している。また竹村・前原・小林(2007)は、スポーツ系部活動への参加が、新しい知識や技術を努力して獲得したいという課題志向性と、友人と協力しながら課題達成をしたいという協同性と関連していることを報告している。

また文部科学省(2008)は、部活動の意義について、「生徒の自主的、自発的な参加によって行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するもの」と述べ、さらに「互いに協力し合って友情を深めるといった好ましい人間関係の形成等に資するもの」と規定している。

本研究では、学習指導要領に示された部活動の意義の中でも、とくに「生徒の自主的、自発的な参加によっ

て行われること」と「互いに協力し合って友情を深めること」という点に注目する。これらの意義が、実際の部活動に反映されているならば、生徒は自身の向上のために自ら努力したり、挑戦したり、工夫したりする行動をより多く示すだろうし、また、チームメイトと共に協力しあうような行動も多く示すと考えられる。

本研究では、自主的に部活動に参加し、その中で自発的に自己の向上をしようとする行動を「自発的な取り組み」、課題の克服や目標達成にむけて他の部員とお互い協力し合う行動を「協同的な取り組み」と定義し、これらの行動に影響する要因について検討する。
スポーツ系部活動における目標

スポーツ系部活動での行動に影響を与える要因については、顧問や主将のリーダーシップや部活内の人間関係が指摘されているが(石田・亀山, 2006; 吉村, 1997)、本研究では、生徒の持つ目標に注目する。

近年、体育・スポーツ場面においても、達成目標理論に基づく検討がなされている(伊藤・磯貝・西田・佐々木・杉山・洪倉, 2008)。例えば、伊藤ら(2008)は、スキルの向上などを旨とする熟達(課題)目標を持つ人は、練習や努力を重視し、スキルの獲得や向上に関心があることから、練習方法や自分の進歩など課題の遂行に関わる情報に集中する。そのため、能力の高さに関わらず、自分の能力やスキルを最大限に高める最適挑戦レベルの課題を選択しやすいことなどが示されている。つまり、体育学習やスポーツ活動を効果的に進めるためには、目標をどのように設定するかが重要で

あり、とりわけ熟達目標が有効かつ重要であると考えられる。

一方、永谷（1998）は、スポーツ系部活動における目標について、個人目標と集団目標という観点から検討している。ここでいう個人目標とは、個人の達成を目標とした「個人」レベルの目標のことで、集団目標は集団全員の達成を目指した「集団」レベルの目標のことである。理想的には、これら双方の目標が一致しており、同時に達成できることが望ましいが、現実的には、集団としての目標を達成し成果を得ることと、個人としての目標を達成し満足感を得ることは両立するとは限らない。このことは、スポーツ系の部活動において、自分の達成や満足がある程度犠牲にすることで、チームが勝つことが優先される場合があることを思い浮かべれば、容易に想像がつかだろう。

永谷（1998）は、スポーツ系部活動に所属する大学生を対象にして、個人目標の高低と集団目標の高低で調査対象者を4つの群に分類し、部活動への活動意欲に差があるかどうか、また活動意欲に関連する監督やリーダーの指導や評価との関連について検討した。その結果、両目標ともに高いメンバーほど、部活動に対する意欲が高く、個人目標と集団目標の両方を持つことの重要性が示された。また活動意欲を高める指導や評価のあり方についても違いが認められ、個人目標のみが高いメンバーに対しては、目標の明確化が効果的であるのに対し、集団目標が高いメンバーに対しては、リーダーとのコミュニケーションや結果の評価が重要であることが示唆された。

このように部活動における目標を、個人目標と集団目標という視点から捉えた研究は数少なく、水谷の研究も中学生を対象にしたものではない。また、個人目標と集団目標についても、個人レベルと集団レベルという区別のみで、目標の内容については検討されていないという問題がある。

本研究では、永谷（1998）を参考に、部活動における目標を個人目標と集団目標という視点から捉えるとともに、その内容についても検討する。具体的には、「自分が上手になること」、「自分が勝利を収めること」といった個人単位とした目標を「個人目標」とし、「自分のチームが勝利すること」、「部員のみんなが上達すること」といったチームを単位としたものを集団目標と定義する。そして、これらの目標が、部活動における自発的な取り組みや協力的行動に及ぼす影響について検討する。

方法

調査協力者と調査時期

調査協力者は、愛知県内の部活動に所属する公立中学校1,2年生の生徒316名（男子189名、女子127名）であった。対象となった部活動は、卓球、ソフトテニス、

剣道、サッカー、軟式野球、バスケットボール、バレーボール、ソフトボールで、田中（1991）に従って、前3部を個人競技部（ $n = 93$ ）、後5部を集団競技部（ $n = 223$ ）に分類した。

調査は、2009年11月中旬から下旬にかけて部活動の時間内に実施した。

調査内容

1. **スポーツ部活動における目標志向** スポーツ部活動における目標は、Gill & Deeter（1988）のスポーツ志向性質問紙（Sport Orientation Questionnaire：SOQ）の邦訳版（若山・猪俣，2000）を加筆修正して使用した。この尺度は、スポーツにおける目標志向性を測定するもので、集団目標については測定されていない。そこで本研究では、これらの個人目標に加えて、集団目標を測定する項目を追加作成した。具体的には、個人目標に含まれる下位尺度として、「個人熟達志向」「個人成功志向」「個人勝利志向」を設定し、集団目標に含まれる下位尺度として、「集団熟達志向」「集団成功志向」「集団勝利志向」を設定した。「競争参加志向」については、個人目標、集団目標の分類が困難であるため、いずれの目標にも含めなかった。本研究における熟達とは、技術や能力の向上のことを指し、成功とは、他者から良い評価を得ること、勝利とは、競争の結果、他者に勝つことをそれぞれ示す。競争参加志向とは、競争すること自体が楽しいといったようなスポーツ場面に特有のものである。

いずれの項目も「私の目標は、…」という文章で始め、内容も中学生に分かりやすいようにした。各下位尺度5項目の計35項目で構成し、それぞれの項目について、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

2. **部活動での取り組み** 谷島・新井（1994）の学習目標志向尺度を参考に、部活動中への取り組みについて、自発的な取り組みと協同的な取り組みに関する項目を各6項目ずつ作成した。そして、それぞれの項目の行動を部活動中にどの程度行なっているかを「よく行う」から「まったく行わない」の4件法で回答を求めた。

結果

尺度構成

部活動における目標志向性尺度について、想定した下位尺度ごとに1因子性を確認するために因子分析を行った（主因子法）。その結果、想定した全ての下位尺度において1因子性が確認され、信頼性も十分な値であった（Table 1）。そのため、想定した各下位尺度をそのまま各因子として採用し、下位尺度ごとに項目平均を算出し、各下位尺度得点とした。

部活動での取り組みについても、同様の手続きでそれぞれ1因子性を確認し、信頼性も十分な値であった

Table1 部活動における目標志向性尺度の因子分析結果

	項目	因子負荷	M	SD	I-T相関
	「個人熟達志向 (α = .82)」				
	18. 私の目標は、自分の技術や能力をレベルアップさせることだ	.83	4.46	0.77	.72
	16. 私の目標は、自分がしっかりとした技術や能力を身につけることだ	.85	4.45	0.79	.73
	2. 私の目標は、自分がもっと上手になることだ	.62	4.51	0.80	.53
	4. 私の目標は、自分の技術を上達させたり、能力が上がることだ	.80	4.40	0.82	.71
	31. 私の目標は、勝ち負けよりも、自分の技術や能力をみがくことだ	.38	3.81	1.04	.34
個人 目 標	「個人成功志向 (α = .81)」				
	19. 私の目標は、自分が選手として成功することだ	.73	3.81	0.98	.65
	11. 私の目標は、相手に勝って自分が1番になることだ	.56	3.20	1.13	.51
	26. 私の目標は、自分が一流の選手になることだ	.75	3.47	1.11	.65
	13. 私の目標は、自分が試合に出ることだ	.64	4.12	0.91	.56
	28. 私の目標は、自分がレギュラーをとることだ	.74	4.18	0.98	.64
	「個人勝利志向 (α = .77)」				
	1. 私の目標は、自分が試合で勝つことだ	.50	3.89	1.01	.44
	32. 私の目標は、自分がよい結果を出すことだ	.64	3.94	0.99	.55
	33. 私の目標は、なにがなんでも自分が競争に勝つことだ	.76	3.33	1.04	.63
	7. 私の目標は、どんなときでも自分が相手の選手に負けないことだ	.63	3.94	1.00	.55
	35. 私の目標は、試合の内容に関わらず、自分が勝利を手にする事だ	.66	3.02	1.12	.55
	「集団熟達志向 (α = .86)」				
	21. 私の目標は、部員みんなの技術や能力がレベルアップすることだ	.89	4.12	0.91	.78
	34. 私の目標は、部員みんながしっかりとした技術や能力を身につけることだ	.83	4.04	0.95	.76
	27. 私の目標は、部員みんなが上手になることだ	.79	4.14	0.94	.72
	8. 私の目標は、部員みんなの技術が上達したり、能力が上がることだ	.70	4.08	0.95	.65
	24. 私の目標は、勝ち負けよりも、部員みんなが、技術や能力をみがくことだ	.59	3.88	1.02	.55
集 団 目 標	「集団成功志向 (α = .83)」				
	23. 私の目標は、自分のチームが成功することだ	.75	3.99	0.95	.66
	29. 私の目標は、相手チームに勝って、自分のチームが1番になることだ	.74	4.00	0.99	.66
	17. 私の目標は、自分のチームが一流になることだ	.72	3.74	1.00	.63
	10. 私の目標は、自分のチームが最高のチームになることだ	.66	4.42	0.86	.60
	6. 私の目標は、自分のチームが良いチームであると周りから認められることだ	.63	4.02	1.03	.56
	「集団勝利志向 (α = .78)」				
	14. 私の目標は、自分のチームが試合に勝つことだ	.74	4.27	0.83	.60
	25. 私の目標は、自分のチームが良い結果を出すことだ	.73	4.24	0.89	.58
	3. 私の目標は、なにがなんでも自分のチームが、競争に勝つことだ	.67	3.73	1.08	.60
	9. 私の目標は、自分のチームがどんなときでも相手のチームに負けないことだ	.66	3.93	0.99	.58
	5. 私の目標は、試合の内容に関わらず、自分のチームが勝利を手にする事だ	.43	3.24	1.14	.40

Table2 部活動における取り組み尺度の因子分析結果

項目	因子負荷	M	SD	I-T相関
「自発的な取り組み ($\alpha = .83$)」				
3. どんな練習でも、自ら進んで練習している	.75	3.05	.71	.63
2. 厳しい練習にも、自分でこつこつ努力して取り組んでいる	.70	3.09	.74	.60
10. 自分で目標や計画をたてて、練習している	.64	2.91	.85	.56
5. 自分でやり方を工夫して、練習に取り組んでいる	.64	2.81	.79	.55
7. 周りを気にせず、練習に打ち込んでいる	.58	2.64	.78	.52
12. 他の部員が頑張っている、頑張っていない、自分のペースで練習に取り組んでいる	.43	2.86	.83	.40
「協同的な取り組み ($\alpha = .79$)」				
6. 他の部員とお互いに協力しながら、練習に取り組んでいる	.81	3.21	.73	.70
9. チームで力を合わせて、練習に取り組んでいる	.75	3.16	.74	.66
11. 1人で行うことが難しい練習は、他の部員と助け合いながら行っている	.69	3.19	.77	.61
1. 他の部員と出来ないところを助け合い、一緒に練習している	.66	3.09	.68	.58
4. 他の部員がやる気のないときには、励まして頑張らせている	.59	2.69	.80	.55
8. 他の部員に、アドバイスやコツを教えている	.53	2.51	.87	.50

Table3 個人競技部と集団競技部の目標志向性の平均値と標準偏差

	個人競技部 ($n = 93$)		集団競技部 ($n = 223$)		t 値
	M	SD	M	SD	
個人熟達志向	4.39	.45	4.30	.69	1.44
個人成功志向	3.86	.63	3.71	.82	1.82
個人勝利志向	3.76	.61	3.57	.79	2.12
集団熟達志向	4.06	.68	4.05	.80	0.18
集団成功志向	4.15	.58	> 3.99	.80	1.99 *
集団勝利志向	3.93	.62	3.86	.75	0.77
競争参加志向	3.58	.74	> 3.31	.94	2.69 **

注: * $p < .05$, ** $p < .01$

(Table 2)。そこで、下位尺度ごとに項目平均を算出し、各下位尺度得点とした。

目標志向性における個人競技部と集団競技部の違い

目標志向性尺度の下位尺度得点について、個人競技部と集団競技部で比較した。その結果、個人競技部に所属する生徒は、集団成功志向 ($t(233.77) = 1.99, p < .05$) と競争参加志向 ($t(216.72) = 2.69, p < .01$) が、集団競技部に所属する生徒にくらべて有意に高いことが示された (Table 3)。

部活動における目標志向が部活動での取り組みに及ぼす影響

部活動における目標志向が部活動での取り組みに及

ぼす影響については、個人競技部、集団競技部ごとに、目標志向性尺度の各下位尺度を説明変数、部活動での取り組みを基準変数とする重回帰分析を用いて検討した (Table 4)。

個人競技部では、集団熟達志向と集団成功志向から、協同的な取り組みへの正の影響が認められ ($\beta = .39, p < .01$; $\beta = .40, p < .05$)、部活全体としての成長や成功を目標にしている生徒ほど、協同的な取り組みを多く行っていることが示された。

集団競技部では、個人成功志向と個人勝利志向から、自発的な取り組みへの正の影響が認められ ($\beta = .28, p < .01$, $\beta = .23, p < .05$)、自分自身の成功や勝利を目標にしている生徒ほど、自発的な取り組みを多く行っ

ていることが示された。また集団競技部では、集団熟達志向から協同的な取り組みへの正の影響も認められ ($\beta = .30, p < .01$)、部活全体としての成長を目標にする生徒は、協同的な取り組みを多く行っていることも示された。

個人目標と集団目標の高低タイプ別の部活動での取り組み

重回帰分析では、目標志向の下位尺度から部活動での取り組みへの影響を詳細に検討できるが、部活動における個人目標と集団目標の組み合わせの効果については検討できない。そこで、次にこの効果について検討した。

まず、個人目標の下位尺度（個人熟達志向・個人成

功志向・個人勝利志向）と、集団目標の下位尺度（集団熟達志向・集団成功志向・集団勝利志向）をそれぞれ合計して個人目標と集団目標の合計得点を算出した。次に、個人競技部、集団競技部それぞれについて、個人目標と集団目標の平均値を算出し、両目標ともに高い群（両目標高群）、個人目標のみが高い群（個人目標重視群）、集団目標のみが高い群（集団目標重視群）、両目標ともに低い群（両目標低群）の4群に分類した。自発的な取り組み得点と協同行動得点をそれぞれ従属変数とし、部活動における個人目標得点（高群・低群）×集団目標得点（高群・低群）の2要因分散分析を所属部活動ごとに行った結果が Table5 と Table6 である。

Table4 目標志向性が部活動への取り組みに及ぼす影響（重回帰分析結果）

	個人競技部 (n = 93)		集団競技部 (n = 223)	
	自発的な取り組み	協同的な取り組み	自発的な取り組み	協同的な取り組み
個人熟達志向	.23	.05	-.02	-.13
個人成功志向	-.03	-.19	.28 **	.16
個人勝利志向	.16	.06	.23 *	.21
集団熟達志向	.27	.39 **	.01	.30 **
集団成功志向	.02	.40 *	.06	.17
集団勝利志向	-.06	-.04	.05	-.03
競争参加志向	-.03	-.13	.02	-.09
R^2	.22 **	.37 **	.32 **	.30 **

注: * $p < .05$, ** $p < .01$

Table5 部活動での取り組みにおける目標タイプ別の平均値（個人競技部）

	両目標低 (n = 35)	集団重視 (n = 9)	個人重視 (n = 9)	両目標高 (n = 40)	主効果		
					個人目標	集団目標	交互作用
自発的な取り組み	2.70 (.41)	3.28 (.34)	3.00 (.53)	3.16 (.46)	0.66	10.50 **	3.44 †
協同的な取り組み	2.67 (.46)	3.44 (.25)	2.89 (.53)	3.25 (.36)	0.02	28.64 **	3.73 †

注: † $p < .10$, ** $p < .01$

Table6 部活動での取り組みにおける目標タイプ別の平均値（集団競技部）

	両目標低 (n = 85)	集団重視 (n = 19)	個人重視 (n = 19)	両目標高 (n = 100)	主効果		
					個人目標	集団目標	交互作用
自発的な取り組み	2.51 (.53)	2.93 (.57)	3.11 (.41)	3.09 (.47)	18.61 **	5.27 *	6.13 *
協同的な取り組み	2.64 (.63)	3.18 (.52)	2.99 (.47)	3.18 (.44)	3.72 †	15.07 **	3.41 †

注: † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

個人競技部では、自発的な取り組み、協同的な取り組みのいずれにおいても、集団目標の主効果が有意となり（自発 $F(1, 89) = 10.50, p < .01$; 協同 $F(1, 89) = 28.64, p < .01$ ）、集団目標の高い生徒は自発的な取り組みと協同的な取り組みを多く行っていることが示された。また個人目標と集団目標の交互作用傾向が認められ（自発 $F(1, 89) = 3.44, p < .10$; 協同 $F(1, 89) = 3.73, p < .10$ ）、下位検定の結果、両目標低群は他の群にくらべて、自発的な取り組み、協同的な取り組みのいずれも少ないことが示された。

集団競技部では、自発的な取り組みと協同的な取り組みの双方において、個人目標の主効果（自発 $F(1, 219) = 18.61, p < .01$; 協同 $F(1, 219) = 3.72, p < .10$ ）と集団目標の主効果（自発 $F(1, 219) = 5.27, p < .05$; 協同 $F(1, 219) = 15.07, p < .01$ ）が認められ、個人目標と集団目標はいずれも自発的な取り組みと協同的な取り組みの双方を高めることが示された。また個人目標と集団目標の交互作用効果も認められ（自発 $F(1, 219) = 6.13, p < .05$; 協同 $F(1, 219) = 3.41, p < .10$ ）、下位検定の結果、両目標低群は他の群にくらべて、自発的な取り組み、協同的な取り組みのいずれも有意に少ないことが示された。

考察

本研究では、中学生を対象に所属する部活動の種類によって、部活動での個人目標・集団目標および、それらの目標が部活動での取り組みに与える影響について違いがあるのかどうか検討を行った。

目標志向性における個人競技部と集団競技部の違いについては、個人競技部は集団競技部にくらべて、集団成功志向と競争参加志向が高いことが示された。

個人競技部で競争参加志向が高かったことは予想されるが、集団成功志向が高かった結果については、部活動の規模や団体戦の多さといったことが関係していると思われる。本調査で個人競技に分類された部活動は、卓球、ソフトテニス、剣道で、サッカーや野球といった集団競技部にくらべて規模が小さい。またこれらの競技での大会は、個人戦だけでなく団体戦が多く行われる。大会において良い結果を得るためには、自分自身の結果だけでなく、チームメイトの結果も重要なものとなる。佐久間・山口・阿江（1991）は、駅伝において、個人の技能の向上は必要かつ重要なことであるが、その他に集団目標達成への協力を十分に高めておくことが大切であると指摘している。駅伝とは、個人技能の積み重ねとチーム同士の争いを含んだ競技であり、本研究における個人競技の団体戦と似た性質を持つものである。このような個人競技部の特徴が、集団成功志向を高めたことが考えられる。

生徒の目標志向が部活動での取り組みに及ぼす影響

個人競技部では、集団熟達志向と集団成功志向が協

同的な取り組みを促進し、集団競技部では、集団熟達志向が協同的な取り組みを促進することが示された。これらの結果から、周りの部員と協力しながら部活動に取り組みさせるためには、個人競技、集団競技に関わらず、チームのみんなで技術や能力を向上しようという集団を単位とした熟達目標の育成が必要であると考えられる。

学習場面での研究ではあるが、石田・川村（2007）は、学習場面における熟達志向は、生徒同士の教え合いや助け合いといった協同や協力的な学習活動を促進する可能性を指摘した。部活動場面と学習場面といった違いはあるものの、本研究の結果は、石田ら（2007）の結果と一致するものであり、部活動場面における集団熟達志向の重要性を示すものである。また、伊藤・磯貝・西田・佐々木・杉山・洪倉（2008）は、体育学習やスポーツ活動を効果的に進めるためには、目標をどのように設定するかが重要であり、とりわけ熟達目標が有効かつ重要であると指摘している。本研究の結果は、伊藤ら（2008）の報告と一致するもので、熟達目標が有効かつ重要であることが改めて示されたといえる。

ところで、個人競技部ではなく集団競技部において、個人成功志向と個人勝利志向といった個人目標が、自発的な取り組みを促進するという結果については、前述した個人競技部の特徴に加えて、調査を行った時期も関係していると思われる。一般的な中学校の部活動では、夏休みを目前に3年生が引退し、1,2年生が主役となる。そのため、今まで試合に出る機会の少なかった1,2年生は、試合に出るチャンスをつかもうと考えたり、実際に試合に出るために努力したりするだろう。そのような状況が、自分が相手に勝ちたい、試合に出たいといった個人成功志向や個人勝利志向を高め、自発的な取り組みを促進させたことが考えられる。

部活動での取り組みに及ぼす個人目標と集団目標の相乗効果

個人競技部では、集団目標の高い生徒ほど自発的な取り組みと協同的な取り組みの双方を多く行っていることが示されると同時に、個人目標と集団目標の相乗効果については、個人目標と集団目標の双方が低い生徒はいずれかの目標が高い生徒にくらべて、自発的な取り組み、協同的な取り組みがともに少ないことが示された。

一方、集団競技部では、個人目標と集団目標はそれぞれ自発的な取り組み、協同的な取り組みをともに高めることが示されるとともに、相乗効果については、個人競技部と同様に、個人目標と集団目標の双方が低い生徒はいずれかの目標が高い生徒にくらべて、自発的な取り組み、協同的な取り組みがともに少ないことが示された。

つまり、個人目標と集団目標の両方を高く持ってい

る生徒ほど、自発的な取り組みや協同的な取り組みを多く行っているという予測は支持されなかったが、個人目標と集団目標のうち少なくともどちらか一方の目標を持つことで、部活動における自発的な取り組みや協同的な取り組みが高められることが示された。なかでも集団目標の高い生徒は、個人競技部、集団競技部のいずれにおいても、自発的な取り組みと協同的な取り組みの双方を多く行っており、これらの取り組みをともに高めていくには、個人目標のみならず、集団目標の育成が重要であるといえるだろう。

伊藤ら(2008)は、体育やスポーツの場面において、動機づけ雰囲気を意図的な努力によって作り出すことが可能であると指摘している。本研究の結果に基づけば、個人競技の部活動では、自分の技術や能力の向上だけではなく、チームみんなの技術・能力の向上や成功を考えるような働きかけが有効であると考えられるし、団体競技の部活動では、チーム全体の向上はもちろんのこと、自分自身の成功や勝利も考えるような働きかけも必要であると考えられる。

本研究では、部活動における目標が、部活動での取り組みに及ぼす影響について検討してきたが、これらの部活動での取り組みは、彼らの技能や能力の向上にどの程度貢献しているか、またこれらの取り組みは顧問や他の部員からどのように評価されているかといった点については検討されていない。自発的な取り組みと協同的な取り組みは、部活動の教育的目標や意義に関連した重要な活動であるが、今後は、これらの取り組みがどのような結果をもたらすのかについても検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Gill, D.L., & Deeter, T.E. (1988). Development of the sport orientation questionnaire. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 59, 191-202.
- 石田 靖彦・亀山 恵介(2006). 中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響：部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 9, 219-225.
- 石田 靖彦・川村 祥世(2008). クラスの目標構造が生徒の学習行動に及ぼす影響 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 11, 255-261.
- 伊藤 豊彦・磯貝浩久・西田保・佐々木万丈・杉山佳生・洪倉崇行(2008). 体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究の現状と展望 鳥根大学教育学部紀要, 42, 13-20.
- 文部科学省(2008). 中学校学習指導要領解説総則編 ぎょうせい.
- 永谷 稔(1998). 個人目標と集団目標が活動意欲に及ぼす影響について—競技的スポーツ集団における目標による管理の視点から— 北海道女子大学短期大学部研究紀要, 35, 105-113.
- 佐久間美幸・山口 敏夫・阿江美智子(1991). 駅伝におけるチームワーカー'89 全国大学女子駅伝選手について—

- 日本体育学会大会号, 41, 562.
- 角谷 詩織・無藤 隆(2001). 部活動継続者にとっての中学校部活動の意義—充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて— 心理学研究, 72, 79-86.
- 竹村 明子・前原 武子・小林 稔(2007). 高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係 教育心理学研究, 55, 1-10.
- 田中 健吾(1991). スポーツ種目の分類の基本的な要件について 日本体育学会大会号, 428, 633.
- 若山 裕晃・猪俣 公宏(2000). Sport Orientation Questionnaire 邦訳版の有効性の研究—スポーツ達成志向性に関する測定尺度の因子的妥当性— 日本体育学会大会号, 51, 182.
- 矢島 弘仁・新井邦二郎(1994). 学習の目標志向の発達の検討および学業達成との関連 筑波大学心理学研究, 16, 163-173.
- 吉村 齊(1997). 学校適応における部活動とその人間関係のあり方 教育心理学研究, 45, 337-345.

(2010年9月16日受理)